

エース葉面施肥シリーズ

エース葉面施肥シリーズは、作物の葉の表面から吸収されやすいある種の成分を含んでいる。この成分により、散布液の吸収が活発化されるので、各種肥料成分も同時にすみやかに作物体内に吸収される。さらに各種肥料成分のほかに、糖・アミノ酸なども含まれているので、タンパク質・デンプンなどを積極的に合成させ、エネルギー源の直接的な供給を行うことができる。

エース葉面散布施肥シリーズにはエース1号・エース2号・エース3号とあり、必要などきに的確なものを選ぶことで、よりよい作物をより多く作ることができる。

エース葉面施肥シリーズ使用のポイント

項目	内容
散布上の注意	<p>使用回数、間隔、濃度、用法を守る。</p> <p>全面散布する前に一部に試験散布し、1, 2, 3号をそれぞれの特徴、効果を自分で確認する。</p> <p>初めて使用するときには効果を確認するため、一部無散布区を設け、比較対照を行なう。その効果は糖度計、ピーシーキットなどで確認できる。</p> <p>2号は根が正常でない場合は使用しない。オキシデーターまたはエース酸素などで根の回復を図った後、使用する。</p>
散布濃度	<p>通常は100倍に希釈して使用する。ただし、苗の時期、萌芽期および高温（30度以上）の場合には150倍～200倍で使用する。</p>
散布回数	<p>所定の回数、間隔の散布を行なわないと、十分な効果が得られない場合があるので、使用法をよく確認する。</p>
散布時期	<p>日の出から午前中の早い時間、または午後涼しくなってから夕方までに乾く時間に行なう。</p>
散布を避ける時間帯	<p>天気の良い日の午前中：気孔が閉じ、その日の光合成ができなくなる。</p> <p>高温時：葉の濃度障害により焼ける場合がある。</p> <p>雨の日：ハウス栽培の場合、過湿になる。ただし、露地の場合高濃度（25～50倍）の雨中散布は効果的である。夕方までに乾かない時間：夜間葉温が下がり作物の活性が落ちる。</p>

農薬との混合	初めて使用する農薬と混合する場合には、その農薬の使用基準に従い、まず小面積で使用し、効果および薬害有無を確認したうえで全体に処理する。ただし、「石灰硫黄合剤」と混合すると、有毒ガスが発生する恐れがあり、危険なので混合は行なわない。 アルカリ性農薬との混用は避ける。
使用上の注意	冷暗所に保管する。希釈した液は残さないよう、その日のうちに使用する。 ナシ、ビワには使用しない。 葉面散布専用なので、根からは与えない。 沈殿物が生じる場合があるが、品質・効果には変わらない。よく振ってから使用する。 口に絶対に入れない。子供の手の届かないところに保管する。

エース1号の使い方

項目	内容	
ねらい	成分	三要素をバランスよく配合し（N-P-K=5-2-3）、作物の栄養補給に最適の葉面散布剤である。
	体力の回復・向上	天候不良、養分吸収の不良、低温などで光合成が低下すると作物全体の体力が落ちてくる。体力が落ちると生産能力が低下し、生長に悪影響を及ぼす。このようなときのすばやい体力回復に効果を発揮する。
	根の回復	せっかく肥料をあたえても根がしっかりしていなくては吸収し利用することはできない。エース1号は根から吸収できないときに、葉面から必要な養分を補給することができる。また新しい根の発育を促し、すみやかに根からの養分吸収を可能にする。
使い方	基本的な用法	基本的に100～300倍で使用できるが、他の薬剤などと混合する場合には200倍以上に希釈して散布を行なう。

	天候急変時	天候不順（日照不足）時に100倍で5日おきに3回以上散布。突然の低温時に100倍で5日おきに3回以上散布（その日は、午前中は蒸し込んで夜温を高めにする）。 晩霜対策の予防には激しい冷え込みが予想される夕方100倍で散布、対策には霜害を受けた翌朝日の出前に100倍でたっぷり散布（その日は夕方まで葉を乾かさないうように何回も行なう）。
	肥培管理の失敗ほか	苗質強化には200倍で5日おきに2回以上散布。苗の肥料切れには200倍で随時散布。 体力向上・耐性強化に100倍で5日おきに3回以上散布。 追肥の遅れには100倍で5日おきに白い根がでてくるまで連続散布（肥料をやりすぎて根がやられたとき）。 なり疲れには100倍で5日おきに元気がでてくるまで散布。高品質化をなろうために収穫2週間前から100倍で5日おきに3回以上散布。薬害の予防には農薬使用時に200倍で混合散布。
	薬害ほか	薬害の治療には100倍で5日おきに2回以上散布。ホルモン処理による不調には100倍で5日おきに2回以上散布。

エース2号の使い方

項目	内容	
ねらい	成分	窒素過剰対策に最適で、窒素の吸収を抑え、消化を促進する（N-P-K=0-5-4）。
	窒素吸収の抑制（栄養バランスの調整）	人は食べ過ぎによって栄養バランスが崩れると、肥満になったり病気になったりする。それと同じように、作物も窒素を与えすぎると作物体内の栄養バランスが崩れる。 このため病気にかかりやすくなり、木ボケ、徒長、水太りなどの症状が現われる。 また、収穫物未消化の硝酸態窒素（発ガン性物質の原料になる）がたくさん残っていると、品質・日持ちが悪くなるばかりでなく、食べる人の健康にも悪影響が出る。そこで根からの窒素の吸収を一時的に抑え、作物体内の未消化窒素のアミノ酸への消化を促進する。

	リン酸・カリの葉面吸収	効率よく葉面から吸収させるので、窒素過剰時の作物体内の養分バランスをすみやかに回復させる。さらに花芽分化を促進したいとき、体内バランスを花芽分化に適した状態に変え、分化を促進する。
使い方	基本的使用法	基本的に100～300倍で使用できるが、他の薬剤などと混合する場合には200倍以上に希釈して散布を行なう。 なお、根が健康でないときには使用できない。エース酸素をかん注するなどして根を活性化してから使用する。
	果菜類	木がぼけて花芽分化が遅れているときは100倍で4～5日おきに3回以上散布（花芽分化の促進）。 ウドンコ、葉カビ、アブラムシがつきやすいときは100倍で4～5日おきに3回以上散布（窒素過剰の解消）。 日照不足で作物が徒長気味のときは100倍で5日おきに2回散布（窒素の消化）。 育苗の時、肥料過剰で作物が徒長気味のときは200倍で5日おきに3回以上散布（窒素の消化）。
	葉菜類・根菜類	品質・日持ちを良くし、ヘルシーな作物に仕上げるために出荷2週間前から100倍で5日おきに2～3回散布。
	果樹類	花数をより多くするために、花芽形成時の20日前に100倍で5日間隔で1～2回散布。 落葉果樹の体力温存のために、葉が落ちる1ヵ月前から100倍で5日おきに連続散布（養分を葉から茎に転流させ次年に備える。未消化窒素の消化）。 常緑果樹の冬支度のために、越冬前に5日おきに100倍で3回以上散布（でんぷん蓄積を促進）。ただし、外気温が10℃を割り込まないうちに行なう。

エース1号 窒素・リン酸・カリをバランスよく含んでおり、作物の体力回復・向上に効果的である。追肥が遅れて困ったときや、作物が成り疲れしたときに使用する。

エース2号 窒素の吸収を抑え、未消化窒素の消化を促進したい時に効果的である。うどんこ病・葉かび病・アブラムシがついてしまうなどの症状の原因は未消化窒素が多いことにある。窒素過剰を抑えたいときに使用する。

エース3号 実や花にリン酸を積極的に効かせたいときに使用する。着果促進、肥大促進、着色促進に効果的である。

エース追肥シリーズ (純粋液肥)

エース追肥シリーズは、根にやさしい水溶性の成分でできている。したがって作物に吸収されやすく、取り込んだ成分は植物体内ですぐに利用されるので、3～4日ですみやかに効果を発揮する。また肥料の効果も長持ちし、肥効は10日～2週間持続する。これまでの追肥のように粉体や粒剤をまくという方法とは異なり、追肥重点主義の液肥として手軽に施用できる。

追肥シリーズでは作物や土壌の状態に合わせて、シリーズの中から必要なものを選ぶことができる。さらにエース葉面施肥シリーズとの併用で効果を上げることができる。しかし、エース追肥シリーズは作物の根がしっかりしていて初めて最大の効果を発揮する。使用前に必ず、根が活発に働いていることを確認する。

根がしっかりしている作物には、朝に葉水が上がる。この葉水がきれいに上がっていれば、根の吸収力は十分なので、追肥の効果が発揮される。

葉水が上がっていない場合には、葉水が上がるようになるまでエース1号を5日おきに連続散布し、同時にエース酸素を施用して早急に根の活力を回復させてから、追肥を行なう。ただし、土壌水分の不足により葉水が上がらない場合もあるので、土壌の水分量には十分注意が必要である。

エース追肥シリーズの使い方

資材名	項目	内容
エース液肥	成分	N-P-K=4-8-3
	効果	積極的な追肥によって作物体・花・実をよくする。
	使い方	施用量はかん水の場合で5～10kg/10a/1回、400倍以上で施用し、かん注の場合で10～20kg/10a/1回、25～100倍で施用できるが、通常は50倍で使用する。
	留意点	土壌中に窒素が多すぎる場合、また作物体に未消化窒素が過剰にある場合には使用しない。このようなときの追肥にはエースリンマグ、カリリン、カリを使用する。なお、より体力を向上させたい場合にはエース1号との併用が効果的である。 2種を混合する場合は、それぞれ100倍ずつ混合して、合わせて50倍となるようにする。混合する種類が増えても同様に最終濃度を50倍となるようにする(根痛み防止のため)。

エースカリリン	成分	N-P-K=0-10-10
	効果	作物体・花・実をよくする。
	使い方	施用量は、かん水の場合で10～20kg/10a/1回、400倍以上で施用する。かん注の場合で20～60kg/10a/1回、25～100倍で施用できるが、通常は50倍で使用する。
	留意点	未熟有機物が多い圃場への追肥はエースリンマグを用いる。なお、実や花の品質を向上させたい場合にはエース3号との併用が効果的である。 2種を混合する場合は、それぞれ100倍ずつ混合して、合わせて50倍となるようにする。混合する種類が増えても同時に最終濃度を50倍となるようにする（根痛み防止のため）。
エースリンマグ	成分	N-P-K=0-10-5-2
	効果	木ボケ・徒長を防止抑制し、作物体・花・実を良くする。 落葉樹では、落ちる葉から幹への養分の移行を進めて、樹の養分を充実させる樹液の流動停止1ヵ月前の施用で養分を葉から茎に転流させ、未消化窒素の消化を促進する。常緑樹では越冬前（11月～12月）の施用で、でんぷん蓄積を促進する（冬支度）。
	使い方	施用量はかん水の場合で10～20kg/10a/1回、400倍以上で施用し、かん注の場合で20～60kg/10a/1回、25～100倍で施用できるが、通常は50倍で使用する。
	留意点	木ボケ、徒長防止・抑制にはエース2号との併用が効果的である。 2種を混合する場合は、それぞれ100倍ずつ混合して、合わせて50倍となるようにする。混合する種類が増えても同様に最終濃度を50倍となるようにする（根痛み防止のため）。
エースカリ	成分	N-P-K=0-0-48
	効果	作物体・実をよくする。
	使い方	追肥倍率は、かん水の場合で500倍、かん注の場合で100～500倍（懸濁液を作り使用）、葉面散布の場合で400～500倍とする。施肥量（10a当たり/1回）はイチゴで～3kg、果実類で～7kg、果樹類～10kgとする。

- * 鉄製容器の希釈は避ける。希釈水としてオキシデーター処理水（100ppm以上）またはエース酸素500倍液を使用するとより効果的である。
- * 口には絶対に入れないようにする。子供の手の届かない所に保管する。
- * 冷暗所に保管する。希釈した液は残さないよう、その日のうちに使用する。

エース液肥 追肥重点主義の定期追肥に、また栄養バランスのとれた作物の定期追肥にバランスよく効かせることができる。

エースカリリン 窒素とカリ・リン酸のバランスをとる。元肥に窒素を多く入れた栽培の定期追肥、および地温が高い時期の窒素過剰吸収の防止・抑制に効果的である。果菜類へのカリとリン酸の追肥に、実や花の品質をよくしたいときに使用する。

エースリンマグ リン酸を効かせ、未消化窒素の消化を促進する。未熟有機物が多い圃場へリン酸の追肥、窒素過剰の症状が出ているときなどに効果的である。また、根痛み回復後の最初のリン酸の追肥、実や花をよくしたいときにも効果的である。

エースメンテナンスシリーズ

エース酸素とエース酸素αの使い方

資材名	項目	内容
エース酸素	酸素不足の時	地下水、還元水を用いた栽培では、水中に溶けている酸素量が極めて少ないため、作物の根は十分に呼吸できない。また、マルチ栽培土壌が空気に触れなくなると、土壌中の酸素は短期間で欠乏してしまう。このような時は10kg/10aを最低月1回使用する。
	根が弱った時	未熟な堆肥や未発酵の有機質肥料は土壌中ですぐに発酵を始め、作物の根に有害な有機酸・炭化水素類を出す。これらが無毒な形に変化させ、作物を正常な姿に戻すために10kg/10aを15日おきに2回以上施用する。
	根が負けてしまう時	土に肥料を入れすぎたり、土壌が高温で根が弱ったときには、50倍にうすめてかん注機でかん注処理、かん水使用時は100～500倍で施用する。
	土壌水分条件の改善	豪雨・長雨などによる冠水、または長期間土壌が過湿状態のときは土壌の酸素は土壌微生物に奪われてしまい、作物の根は窒息して枯れてしまう。施設栽培ではかん水設備を利用し、10kg/10aを1回以上施用し、露地栽培（野菜・果樹）では10kg/10aをかん注機を使って50倍以上にうすめてかん注処理する。
	過密な育苗床に	イネの箱育苗では、500倍液を500cc/1箱を育苗中1～2回かん注。 イチゴでは、夜冷、冷水処理期間（15～20日間）に、500倍以上にうすめて冷水を循環させる。

	留意点	直接、茎葉にかからないよう使用する。やむをえず、かかってしまう場合は300～500倍にうすめて使用する。 口には絶対に入れない。子供の手の届かないところに保管する。希釈した液は残さないよう、その日のうちに使い、冷暗所に保管する。
--	-----	---

エース酸素 作物用に開発された酸素供給剤である。土壤中の酸素不足や酸素が必要なときに、発根促進と根の活性化によって根を元気にして作物の生育を助ける。

資材名	項目	内容
エース酸素α	土壌への酸素補給	酸素不足、酸素が必要な時に、できるだけ回数を多く使うと効果的である。土壌かん注時で50倍、かん水使用時で100～500倍、イネの箱育苗に500倍で500cc/1箱（育苗中1～2回）。
	土壌感染抑制	青枯れ、立ち枯れ、白絹、菌糸、疫病、萎しゅう病、根腐れ、炭そ病など。培地を酸素が豊富な状態に保ちながら静菌作用により病原菌を抑制する。発病予防には株際散布（10～50倍で4～5日おきに2～3回処理）。発病後は株際および患部に原液を塗布またはスプレー処理（4～5日おきに2～3回処理）。
	空中感染抑制	うどんこ、白サビ、灰カビ、べと病など。作物体の各組織を強化し、耐病性を向上させる。発病予防（暴風天が続き、気温が低めるとき）には100～200倍で4～5日おきに3回以上散布。発病後は所定の農薬と混合使用し（アルカリ性農薬と混合不可）、200倍で4～5日おきに3回散布。
	留意点	口には絶対に入れない。子供の手の届かないところに保管する。希釈した液は残さないように、その日のうちに使い、冷暗所に保管する。

エース酸素α 酸素を供給すると同時に、土壌病原菌の繁殖を抑制する効果もあるので、土壌感染による病害を防ぐことができる。うどんこ病や白さび病、灰かび病などに効果的である。